

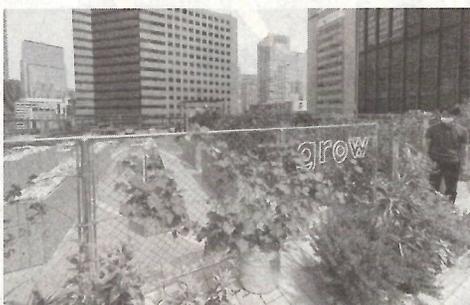
ビル屋上農園、新機軸続々

東京都心部のビル屋上などを活用し、野菜を栽培する都市型農園が広がっている。屋上緑化に加え、地産地消によって食材輸送の環境負荷を示す「フードマイレージ」を低減する。都市部の住人や子どもの農業体験の機会づくりとしても期待される。スタートアップや専門商社などがデジタルなど新技術も使い、新機軸を相次ぎ打ち出す。

都心部、デジタル技術も活用

東京・大手町を象徴する三菱地所の老舗オフィスビル「大手町ビル」(東京・千代田)に5月下旬、都内最大級のシェア型屋上農園が誕生した。相次ぐ再開発で周囲に建設された超高層ビルを見上げる高さの屋上に、広さ500平方メートルを越す農園が広がる。

農業のデジタルトランスフォーメーション(DX)サービス「grow」を手掛けるスタートアップ、プランティオ(同・渋谷)が運営し、ナスやピーマンなどが植えられたプランターが並ぶ。農作業は登録したメンバーらが手分けして進め



プランティオは大手町ビルにシェア型の屋上農園を設置した(東京都千代田区)

初心者楽しく農作業

水耕栽培・魚の養殖融合も

る。あらゆるモノがネットワークにつながる「IoT」技術を駆使し、温度や水分などはセンサーで測定してデータを収集する仕組みを導入。データを踏まえ、水やりも間引きも適切なタイミングをアプリがアドバイスする。そのため、メンバーは初心者でも楽しんで農作業ができる。芹沢孝悦CEO(最高経営責任者)は「日本のシェア型農園は区画ごとに区切られ、コミュニティが形成しづらかったが、この農園はみんなで作業するのが特徴」と話す。



新宿区立柏木小学校は児童らが参画する屋上農園を展開する(東京都新宿区)

「小学校の屋上を野菜の森に」。新宿区立柏木小学校も5月下旬、飼料・農業資材の専門商

社ニチリウ永瀬(福岡市)と連携して「野菜の森プロジェクト」を始めた。1000平方メートルある小学校の屋上を全面的に屋上農園とし、児童や保護者、地域が連携してピーマン、トマトなどを栽培し、7月に収穫のピークを迎える。

プロジェクトは小学校の屋上栽培を手掛けてきた同小学校の竹村郷校長とニチリウ永瀬が連携し、資材などの提供を受けて栽培する。「野菜の一部は児童による販売も考えており、経済がどう回っているか学んでもらう」(竹村校長)。ニチ

リウ永瀬は新たなビジネスモデルづくりにもつなげる。スタートアップのAGRIKO(東京・世田谷)は、水耕栽培と魚の養殖を合わせた「アクアポニックス」型の屋上農園、AGRIKO FARM(同)を今春、東京・桜新町のビルに設置した。収穫した野菜はコーヒー製造・卸の小川珈琲(東京都)が同じ建物で運営する飲食店のメニューに採り入れている。

農園は屋上が未使用だった建物を活用した。農業用ロボットや遠隔での観察といったIT(情報技術)を活用したり、障害者らが作業で活躍できる場として売り込みながら、他の場所での展開も目指すという。

スタートアップや専門事業者の取り組みが進む背景には、持続可能な開発目標(SDGs)の観点から場所を提供するなど大手企業や自治体に連携しようとする動きが広がっているからだ。ロシアのウクライナ侵攻や円安に伴い食料自給率などへの関心が高まるなか、マッチングが進むことで新技術などを生かした事業が一段と広がる可能性もある。